

---

# 桜舞う日に蘇る

Sakura愛姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜舞う日に蘇る

### 【Nコード】

N2075E

### 【作者名】

Sakura愛姫

### 【あらすじ】

これは、一度しか恋をできなかった私の記憶。鮮やかに余韻を残すもの・・・想いを伝えないと、後悔する、ということを感じ取ってもらえたら嬉しいです。

時は、僅か5年前。

「・・・桜庭結愛サクラバユアです。」

広い教室。セーラー服を纏った女子。学ランを着こなしている男子。それらを見渡し、私はぶつきら棒に「桜庭結愛」という名前を呟いた。

両親の転勤が理由で、長年通っていた小中高一貫校を後にした。

・・・まあ、平凡すぎる見飽きた学校を離れるのは、私にとって好都合なのだが。

「それじゃあ皆、仲良くするように。桜庭の席はいちばん後ろの窓側だ。」

担任だと思われしき男が、私を窓側のいちばん後ろ・・・という転入生特等席に托す。

私は託されるがまま、その席に足を進めた。

席に着いて気づいたが・・・隣の席の人間は、いなかった。

HRが終わり、校内探検をすることを志した。

校内を探検すること数分。

予想はしていたが・・・

「・・・迷ったし。」

場所は、どこか分からない・・・多分、校舎裏と思われる場所。

まだ着慣れていない制服の裾をギュツと握り、自嘲気味に笑った。

自分がこんなバカな人間だったとは・・・10数年生きて、産まれて初めて思い知らされた。

1人、自分自身のバカさに呆れてた時・・・

「・・・桜庭じゃん？」

いきなり、上から何かが降って来た。

それは、気持ちいい音を出して地面へ着地する。

自分の横に来た物体を見下ろすと・・・それは、顔を上げて、子供の  
のような笑顔で笑ってた。

「えっと・・・誰君だったっけ？」

「あ、桜庭の隣の席の星置拓哉。ヨロシクな？拓哉でいいから。」  
星置君・・・いや、拓哉は跪いたために膝についた土を払いながら  
立ち上がる。

座高を見た時から思ったけど・・・本当、背が高い人だ。

「てか、なんで桜庭、ここに来た？」

「・・・校内探検してたら、迷った。・・・おかしいよね。転入し  
た意味もないのに。この学校に関心持つなんて。」

疲れ切った体を伸ばしながら、何食わぬ表情でそう答えた。

・・・人間不信だった私だが、不思議と拓哉とは普通に話せれた。  
多分、拓哉は人を惹きつける天性の才能があるのだろう。

「さすが桜庭だな。ここさ、俺の秘密基地。色々細工して校長に怒  
鳴られてるけど。」

拓哉は、樹の上にある木で出来た床を指差しながらそう言った。

「・・・へえ。おもしろそう。」

「桜庭も行ってみる？」

拓哉の誘いに乗った私は、その床に繋がる梯子を自ら上った。  
頂上に着くと・・・

「・・・うわぁ・・・」

思わず、感嘆の声が出てしまうほどの・・・綺麗な街の風景。  
色取り取りの街の風景。それに、今日の前にある桜が上手いぐらい  
に風景に合っていて、綺麗さがより倍増していた。

「・・・さつき桜庭、転入した意味ないって言ってたよな？」

「・・・うん？」

「こんな街に出会えて・・・意味がないワケくない？」

・・・その拓哉の声は・・・

まるで、私の心の中全部を察知してるようで・・・物憂げな瞳で、そんなことを言った。

「・・・そうだね。こんな街に来てよかった。」  
私は心の中から、そう思った。

この学校に転入できたこと。この街に出会えたこと。  
そんな些細なこと嬉しさを・・・この桜色の風景が。  
そして、拓哉が教えてくれたんだ。

この時、私は知る予知もなかった。

『こんな街に出会えて・・・意味ないワケくない？』  
この言葉に・・・あの瞳に、あんな物語が隠されていたことを。

それから。私は毎日のようにその秘密基地へ通った。

桜が散った日から、緑色の葉だけがレイヤーとなった街の風景にな  
ってしまっただけ、やっぱりその風景も好きだった。

そんな日々を募らせる一方・・・私は、拓哉に対し、何ともいえない感情を募らせていた。

いろんな要素が混じった、複雑な気持ち。

その感情の総称は・・・俗に言う、「恋愛感情」だということは・・・  
気づいていなかった。

気づいていたら・・・今の現状は変わっていた？

変わらなかったよね。多分。

神様って・・・運命を・・・変えざるを得ないのだから。

・・・

転入して、早5ヵ月。

そんなある日の朝。私の隣に　彼の姿はなかった。

私が転入してから、1回も休まなかった拓哉。なんか妙に怪しい気  
持ちになった。

しばらくすると、HRが始まった。

いつものように威勢の良い声で「おはよう！」と叫ぶ担任の大倉だったが・・・今朝は、真剣な面持ちで教室へ足を踏み入れた。

「・・・今日は、残念な話がある。」

大倉は、教卓に手をつき、顔に負けない深刻な声で・・・一言一言噛み締めるように話す。

その後の言葉を聞いた途端。私の足は・・・迷いもなく、“あの場所”へ向かっていた。

走っている間・・・何も考えず、ただただ我武者羅に走っていた。何回も木霊するのは

星置拓哉が、心臓発作で昨夜他界した。

大倉の口から出てきた・・・『虚実』。

虚実。虚実。真実ではない。真実では・・・

でも。真実と証言するには・・・証拠がひとつもなかった。

証拠・・・拓哉の姿が。

校舎裏につき、秋支度を始めた樹に手を翳す。

「・・・拓哉あ・・・」

そのまま、縋りつくように樹を抱き締めた。

『何やってんだよ結愛。樹が恋しいのか？』

いつものように、からかって『結愛』と呼んでくれた声は　　い  
くら耳を澄ませても、聞こえなかった。

でも・・・伝えたいこと・・・今さっき気づいた、『混じった感情』  
の・・・

「・・・好きだよ、拓哉・・・」

恋愛感情。それを伝える言葉……  
でも、聞いてくれる拓哉は　　モウ、イナイ。  
もっと早く気づけていれば……拓哉が生きているうちに、伝えれ  
ただろうか？

伝えれたら、何か変わっていたのだろうか？

多分、変わらなかつただろう。

神様は、運命を……変えないのだから。

変えざるを、得ないのだから。

そのまま、私は樹に縋り付いて……涙が枯れると思うほど……

10年ぶりの涙を、樹に染み込ませた。

そんな中学生の頃の物語を、今となっても鮮明に蘇る。

5年経った、今でも。

風の噂で聞いたが、拓哉は随分前から心臓に病気を持っていて……  
中学校を卒業するまでに生きていられるかどうか分からない状態で  
あつたという。

それと……影で、私のことを想っていた……ということも。

そんな2つのことの素振りを見せなかつた拓哉は……やっぱり、  
凄いと思う。

『こんな街に出会えて……意味ないワケくない？』

あの時の物憂げな瞳は……自分の命の期限を想っていたのだろう。

そんなことにさえ、私が気づかなかつたから……

切ない気持ちにならなかつたから……

『綺麗な思い出』のまま、蘇ることができんだよね。

そう。たった一度の、綺麗な恋した記憶。

「お〜い結愛あつ！写真撮るよおっ！」

「あ、うんっ！」

中学時代のクラスメイトの、アタチヨロコ安達陽子が手招きをする。

そう。今日は中学校の同窓会。あの時のクラスメイトが、全員集つ

ていた。

そう。全員・・・

「じゃ、写真撮りますよおっ！」

大倉が、この日のために買ったというカメラを設置し、自分の場所へサツとつく。

5秒後・・・シャッターがキラツと光り、この日だけの“中学生”を撮った。

私は・・・拓哉の遺影を抱き締め、あの時の拓哉の笑顔に負けないほどの笑顔をつくった。

春になると、君を思い出す。

桜の花弁のように、儂く舞い散ってしまった君のことを。

儂く舞い散ってしまったけれど、君への想いの余韻は、まだ心の中で鮮やかに響いている

・・・

この場所で。

君に恋した記憶を思い出す。

褪せることのない　　甘いばかりではない、悲しく、苦しく、愛しい日々を・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2075e/>

---

桜舞う日に蘇る

2011年4月15日18時32分発行